

建設の碑

札幌建設の地碑と新しい大友亀太郎像

札幌建設の基点

創成橋の西詰めに大友亀太郎の銅像が建てられたのは、銭函道と彼の建設した大友堀、つまり現在の南一条通と創成川が交差するこの場所が、札幌の中心となったからだ。

明治二（一八六九）年十月、開拓使判官の島義勇は札幌に入ると、銭函道と大友堀の交点を基点に碁盤目のような都市計画を策定した。しかし、気性の激しい島は、上司である開拓使長官の東久世通禧と衝突するなどして、明治三年一月、たった三カ月で開拓使判官を解任された。その後、島の後を継いだ岩村通俊によって、やはり創成橋の東詰めを基点に現在の基となる札幌都市計画が実施されたのだ。

大友亀太郎像がある創成橋の西詰めから、橋をわたって東詰めにいくと、そのことを示す札幌建設の地碑と平成二十三年に再建された北海道里程元標が建てられている。札幌建設の地碑は、高さは一・四メートルで四段重ねになっており、一番下の方形が北海道を、その上の球形が札幌を、さらに上が東西南北を、最上段のねじり鉢が天壤無窮を表し、札幌の永遠なる発展を祈念したものだという。

さて、東区の北一三条東一六丁目にある札幌村郷土記念館が、大友亀太郎の役宅跡だということで、行ってみることにした。地図を見ると創成川を北六条

あたりまで北上すれば、碁盤目を突っ切るように、北東に向かって郷土記念館まで斜めに道が延びている。花畔札幌線と言うらしいが、これは大友堀の経路と合致する。堀筋が道路として残っているのだろうか。そんな想像をしながら、四〇分ほど道をたどると郷土記念館についた。

すると、どうしたことか。記念館の前庭に創成橋の大友亀太郎像と全く同じ像があるではないか。創成川アンダーパス工事に伴って、一時この場所に避難していたことは知っていたが、すでに創生橋に戻されているのは今さつき確認したばかりだ。

不思議に思いながら記念館に入ると、初老のご婦人が迎えてくれた。銅像のことを尋ねると、あれは複製だという。アンダーパス工事の完成によって銅像を返すことになったものの、やはりこの場所にも欲しいと、札幌村郷土記念館保存会がオリジナルと同じく東区役所ロビーにある像を元に制作し、平成二十二年十一月に除幕式を挙行したのだそうだ。

そういえば、碑文は創成橋の銅像と同じだったが、文末に（複製）とあった。「複製といっても発泡スチロールではないでしょう？」と聞くと、何を言うか「銅像ですよ」と返された。同行者は私の物言いに、気が気ではなかったらしいが、つまり「同じ型で作

った銅像ならば、それは本物ですね」と言いたかったのだ。発泡スチロールは余計だったか。しかし、打って変わって「そうです。本物なのです」わが意を得たりと応えてくれた。ご婦人も関係者の一人なのだろう。製作が遅いか早いかの違いだという。ならば碑文には（複製）ではなく、新しい銅像を作成した経緯や建立者たちの思いを刻めばよかったのと思った。

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館

江口知秀
Tomohide Eguchi



札幌建設の地碑

【交通】札幌駅から徒歩約15分

※碑文の全文は日建連HPに掲載しています。